語学教育研究論叢第23号

マス・メディアを援用する辞書なし長文英文速読力強化法
——大学生に相応しい時事知識のビルドアップを目指して——

小林　裕子

Rapid Reading: Employing the Media Source

KOBAYASHI　Yasuko

Kobayashi feels the urgent need for the students, especially at university-level, to be equipped with a good general knowledge of current issues. She believes that such knowledge is indispensable in attaining a certain level of TOEIC test score, not to mention necessary in order that students be recognized as efficient social individuals.

Kobayashi encourages students to handle reading tasks without the use of a dictionary, instead coming up with the meanings of unknown vocabulary through contextual guessing. She knows that it is made easier if students are encouraged to be interested in both domestic and international social issues. A little general knowledge of such issues can help students to a great extent in understanding and dealing with reading tasks.

In this study, Kobayashi presents the effects of supplying students with information initially in Japanese before they approach an English reading task. Thus students have a background of "general knowledge" which aids their guessing of new words from contest and helps them to handle the task

quickly and more efficiently, without an excess dependence on dictionaries.

1. まえがき

小林 2003（東京電機大学総合文化研究 2003）では、多くの学生が共通の悩みとして訴える、『語彙力の絶対的不足』を解決するための試みを紹介した。その中で、筆者が強調したのは単語の本質的意味を理解するために、辞書に頼ることなく前後関係からその意味を理論的に推測することを学生に積極的に勧めることであった。従来の英文読解は、ともすると英語単語を日本語単語に、多少無理をしながらでも一対一に置換する事に時間をかけすぎるきらいがあり、進度が極端に遅くなり、学生の意欲をそぐ場面もしばしば見られた。（小室俊明　語学教育研究論叢第 18 号）

また、筆者は著書（三修社 2004）において専門分野の国際関係、国際政治、法律、外交、政治を担当しているが、特に以下の三点を念頭において例文執筆にあたった。

① 例文は大学生に相応しいものであること。

多少専門的な文言が含まれていてもそれが大学生の教養として必要ならば『遠慮』せずにその文言を使う。例文が極端に口語的であることは避けるべきであると筆者は考える。少なくとも筆者が授業の中で取り上げるべき題材は、大学生の教養を深めるのに役立つべきものであり、口語的な表現は基礎的な教養にあふれた英語を習得する過程を通過、経験した学生であれば比較的容易に自習可能であると考えるからである。英文速読においては、論理的推理が必要とされるのであるから、少なくとも講義時間内には、顔の表情やイントネーションに多くをたのむ口語英語とは異なったアプローチを、試みたいと思うのである。

② 単語の使用にあたってはできるだけ、その単語が具体的に使われている場面を紹介できるようにする。

例えば、human rights という表現を紹介したい場合は

X　We have to encourage people to respect human rights. という

ような抽象的概念ではなく、

○　The committee was established to further discuss the Universal Declaration of Human Rights.のように human rights　という表現が具体的に登場し、実際に使用されている

状況の例文を執筆するようにした。

③　声に出したときにリズムが良い例文になるようにした。

英語を学ぶ終局的目標を『英語を話せるようになる』と掲げる学生が多いことを頼もしく思い、学生の頭の中のハードディスクに書き込みしやすいように、なるべくリズムの良い例文をインプットしてもらい、例文の英単語/表現を他の英単語/表現に置き換えることによって、簡単に英作文ができるように工夫した。

私事で大変恐縮ではありますが、アメリカの公立中学校に突然放り込まれた経験を持つ筆者が数十年経過した今でもコーラスの授業に歌った歌詞は鮮明に覚えている実体験から、リズムの美しい文章は記憶に残り、応用に耐えうると考えるからである。(フィドラー　オン　ザ　ルーフで歌った　If I were a rich man などはその楽曲タイトルからして既に立派に、重要な文法事項を体現してくれているのである。)

2．問題の所在

さて、高邁な精神（？）をもって、辞書なし英文速読読解の挑戦状を学生にちらつかせたつもりであったが、所謂『戦後 60 年』が経過し『冷戦』も知らず『湾岸戦争』の時には幼稚園生であった学生にとって国際関係は遠い存在であり、歴史を破線的にしか学ぶ機会を与えられていない学生にとって全く理解不能の事柄が多すぎるという現実にぶつかった。また、多くの学生にとって情報は通過していくものであり、精査の対象とはなりえないものである。つまり、テレビからニュースが流れているのを聞き流してはいるが、その内容に関し興味を持ち調べる、あるいはネットでチェックしたニュースを追跡し、自分なりの考えを形成するという習慣はあまりないようなのである。

政治学科出身であり、大学院では比較的法律の分野でも『理想論を語りやすい』国際私法専攻ということが大いに影響し、学生には「このセンテンスは結局、何を言いたいの？」あるいは「この事について、〇〇君/さんは、どう思うの？」を連発し、理屈っぽい学生にしか支持されない筆者ではあるが、『自分はどう思うか』という所まで行き着かなければ学生への働きかけが中途半端であるという強迫観念に近いものをいだいているのである。

現在進行形の社会現象に対する理解および分析の深さは、その社会現象の背景知識の有無で大差が生ずる。具体的に言えば、2005 年 6 月現在継続しているイラクにおける各国の軍事活動の背景には 1990 年のイラクのクエート侵攻（所謂、湾岸戦争）の知識があると理解が早いし、また現在のイラクにおける軍事衝突についての新聞記事の多くもまたイラクのクエート侵攻について触れている場合が多いのである。

残念ながら、国際関係、国際/国内政治、国際/国内経済に興味を持たない学生に、ＴＯＥＩＣ，英検、国連英検、そのほかの検定試験・資格試験の読解問題に挑戦してもらおうとしても、『内容把握』ができないのである。つまり、英語から日本語への置換作業を苦労して終えても、そこに出現した日本語の内容が理解できないのである。

２－１　英語読解設問における時事問題の増加

以前から、「時事問題は要チェックですよ」と、英語資格試験および認定試験を受験しようとする学生にアドバイスをしていた筆者であったが、具体的に時事問題の扱いの動向について述べたいと思う。

学生の中で比較的、知られている実用英語検定試験（ＳＴＥＰ）と国連英語検定試験を見ると、実際、時事問題に関する出題が増加している。

学生の中で関心が高まってきている国連英検においては 2003 年度から、Ｂ級で新聞記事の長文読解問題が大問題一問から二問に増えている。質問項目は１０個から２０個に増加している。内容としては、2002 年第２回の試験においては 2000 年５月３０日付けの *The Washington Post* から移民問題に関する出

題で、時事問題というよりも国連英検という観点から、その内容に注目した出題であったといえる。

しかしながら、２００３年第１回、６月中旬に実施された試験においては２００３年４月１２日付けの *The New York Times* からの出題と２００３年４月１２日付 *The International Herald Tribune* からの出題で、合計２０問が出題されているのである。いずれも、試験実施日からわずか二ヶ月前の日付の新聞記事から出題されたこととなる。

２００３年第２回、１１月上旬実施の試験においてもやはり、２００３年９月１６日付の *The New York Times* からと２００３年９月１７日付 *The International Herald Tribune* からやはり合計２０問出題されている。

同様の傾向は英検（ＳＴＥＰ）においてもみられる。以前から、英検の特に二級以上の級では国際関係関連の出題は多かった。しかしながら、特に時事問題というよりも、高校の教科書で比較的基本であると認められ、とりあげられている国際問題関連の記事をとりあげる傾向が強く、どちらかといえば『基礎知識の確認』とも捉えられる出題が多かったように思える。

英検（STEP）では平成 15 年度第 1 回検定試験から、３５０words 程度の英文長文読解の設問大問二問に、さらに大問が一問付け加えられた。英検の長文出題傾向としては、米国における社会問題に題材を求めた設問、および自然科学関連の話題に題材を得た設問が比較的多く出題され続けている。平成 15 年度からは、上述した分野の設問に加え,１２０words 程度の e-mail のビジネス文書が出題されている。英検（ＳＴＥＰ）の出題傾向は、前述したように米国の社会事情に題材を求めたり、自然科学分野における新しい発見を環境問題と連動させて出題する傾向がみられる。英文の出題量の増加は速読読解の必要性を絶対的に高めているのである。

２－２　時事問題の速読に対処するための知識の補強について

１９９２年から筆者はＳＴＥＰの面接委員を受嘱しているが、受験者の応答に関してその応用力の不足、あるいは受験者の臨機応変な反応が激減している

ことに不安を感じている。受験者の応答が『マニュアルに沿って反応』しているのではないかという危惧を強く感じている。特に、自由回答の場面で受験者自身の考えを述べる場面においても『マニュアル対応』的な反応がみられ、打開策の必要性を強く感じていたのである。

このような折、面接試験の設問の中に、新聞を読むか否かを問う場面があった。

信じ難いことだが、私が担当した受験生の中で新聞を読むと答えた受験生は２１人中２人であった。担当級が準２級であったこと、また限られた数の受験生しか担当できないことを勘案しても驚くほど少ない数字であると言えるのではなかろうか。また新聞を読まないと答えた受験生の殆どが家庭に新聞がないと、説明したのである。

英語の長文を速読読解するにあたり、英語の語彙力だけではなんとも対処できないのは明白である。前述したように、英単語を日本語に変換しても、その日本語を理解できる基礎知識が欠けていると「何を言っているか分からない」というのは残念ながら授業の日常風景になっている。

長文を速読読解するためには、文中に存在する語彙と『文中には書いていない語彙』、つまり学生の頭の中にある、一般常識、社会常識、時事問題の知識そして今まで蓄積してきた知識を駆使して全体を把握する統合的理解力が必要である。様々な知識を統合し、いわば理論的必然に導かれて英文を速読する力は、ひいては就職し自ら判断し決定し行動していかなければならない未来の社会人に求められる力ではなかろうか。『皮相的に捉えるのではなく計算上の「テクニック」にどんな「理由」や「背景」があるのかという事を軽視して安易に「やり方」だけに頼る勉強法の危険』（芳沢光雄　数学的思考法――説明力を鍛えるヒント――講談社現代新書　２００５年）という言葉には筆者だけではなく、大学の教壇に立つ多くの教員が大きく頷くのではなかろうか。

３－１　学生はどの様にして時事知識を得ているのであろうか

学生が示す興味の範囲が極端に狭まっていることは、前任校でも強く感じており、新聞を使ったセミナー形式の時事英語読解クラスを担当した折には、日本語の新聞を読んで先ず基礎知識を提供し、次に同じトピックについて書かれている英字新聞を読むという授業を試みた。英文科でもなく、英語の語彙力もさほど豊かではない学生が受講者であったが、法学部や経済学部の学生が対象であったことから、時事問題に比較的、肯定的な反応を示してくれた。また、通常英字新聞を読む機会が全くない学生達にとっては、英字新聞が『読める』という感覚は優越感をくすぐるものであり、それなりの満足感を感じてもらうことができたようである。社会問題について意見を交わす機会を持つこともでき、学生にとっては自分の意見を他の人に公表するという数少ない機会を提供できたことも筆者の喜びとするところであった。

さて、前述の英検の面接試験を経験してから、筆者は学生達がどの様にして日々、国内外の政治・経済・社会事象の情報を得ているのかが大変気になりだした。

そこで、カトリックの法王であるヨハネ・パウロ二世が死去し、中国では反日デモンストレーションが毎日のようにくり広げられていた期間である２００５年４月２４日から４月２６日の三日間にわたり、大学一年生、二年生、三年生、合計１２０人余を対象に、どの様にして日頃ニュース情報を得ているのか、そして国内外の基礎的社会事象についての知識の有無を記述形式で答えてもらった。

結果は次頁の表のとおりである。

質問項目１から８については『はい』と答えた学生の割合である。

質問項目 A から J についてはすべて記述形式としたので、過度な厳密さを求めず、基本的な内容を把握している場合は正解とし、その正解者の割合である。

また、質問項目が偏らないように、表の一番下に示したように、質問は最近の国際問題から長期中期的に及ぶ幅広い設問を心がけた。アンケートの実施は２００５年４月２２日から４月２６日であった。最新ニュースとしては二項目選

んだ。一つは、２００５年４月３日に死去したヨハネ・パウロ二世の後継者を選出するコンクラーベ（同年４月２０日に新法王決定）である。二つ目は２００５年４月９日から急速に広まり、４月１７日に最大化し４月２０日に中国メディアが非合法デモへの不参加を呼びかけたという一連の動きがあった中国における反日デモンストレーションである。アンケート実施前後の期間において最も新聞およびテレビでにぎやかに報道されていたニュース項目であったので学生のニュースへの知識、興味、反応を知るのには格好の題材であろうと判断したのである。

学年・人数 / 質問項目	一年 55	二年 45	三年 21
	%	%	%
1.新聞を読む	23	36	42
2.テレビでニュースを見る	86	84	66
3.ネットでニュースを見る	30	42	47
4.ドキュメンタリー番組を見る	46	36	42
5.クイズ情報番組を見る	46	58	28
6.本を読む（小説・評論など）	43	36	71
7.ニュース解説番組を見る	43	53	57
8.政治討論番組を見る	20	10	23
A．コンクラーベとは何ですか？	10	20	42
B　日本が常任理事国になろうとしている国際機関の名前は？	36	41	57
C.　ODA とはなんですか？	10	14	28
D.　9・11同時テロを受けて米軍が侵攻した国の名前は？	70	78	66
E.　韓国や中国が問題視する日本の歴代首相が参拝する神社名は？	93	90	90

F.　日本国憲法の第9条の理念は？		70	58	76
G.　米国は首相ですか？大統領ですか？		86	87	85
H.　中華人民共和国の指導部は何党？		26	28	28
I..　自民党の中で論争が続いているのは何の民営化に関してですか？		70	85	76
J.　冷戦(Cold War)とは何ですか？		36	35	61
最新時事問題	A　H			
中・短期　国内・国際問題	D			
中・短期　国内問題	I			
中・短期　国際問題	G			
中・長期　国内・国際問題	B C E			
中・長期　国内問題	F			
中・長期　国際問題	J			

３－２　最新時事情報知識の少なさ

上のアンケートの結果から、問題ＡとＨの正答率が極端に低いことが読み取れる。ＡとＨは共に最新時事問題であった。アンケート実施期間において、まさに現在進行形のニュースであった、コンクラーベと中国における反日デモンストレーションのニュースは本来、最も学生の記憶に新しく、興味や理解を期待したのであるが、残念ながら正答率は最低であった。対照的に、高校時代に先生から「教えられた」事項は理解度が高かったのである。学生に「これはテストに出しますよ」と伝えると真剣に取り組むことから推察できるように、高校時代の教科書に登場した国内外の事項については一通りの知識は持っているが、大学生になり『強制』から解放されると、好奇心に裏打ちされない知識欲は消滅してしまうとでも思えそうなほど最新社会事象に対する関心は低いと、アンケートから読み取れる。　けれども、全く関心がないのではなく、授業中

に最新ニュースの話題を持ち出すとそれなりの反応をしてくる学生も少なくないのである。大人としてそれなりの丁寧さを示して話しかけると学生は発言も積極的になるのである。学生の、積極的かつ自律的探究心だけに頼ることができないがゆえに、学習内容そして学習方法の提示の仕方に関する工夫は大変重要であると考えられる。

３－３　学生への encouragement は充分であったろうか

充分に下準備を重ね、情熱を持って毎日学生の前に立つことは理想であり、理想は実現されるべきである。情熱を持って知識を惜しみなく与えてくれる教員とめぐり合える学生は幸せである。90 分間の授業が終了した時点における達成感は次の授業への意欲をかきたてる原動力となるのである。義務教育を通してミスを犯すことを恐れ、他者と違う意見を持つことを嫌い続けてきた、大学生に突然、間違いを恐れずに、積極的な発言をするように求めても一朝一夕に気持ちを切り替えることは難しいであろう。学生の発言意欲を encourage するために正解を引き出すための様々な工夫は不可欠である。

１．少ないボキャブラリーを補い
２．日本語の語彙の少なさをも補い
３．社会常識を補い
４．時事問題に対する知識の少なさを補い
５．他の学生の前で「恥をかかせない」ように気を使い

ながら、長文を英文速読するには何か良い方法はないか――と頭をひねった結果、たどり着いたのが日本語の新聞を読んだ後、同じトピックを扱った英字新聞の記事を読むことである。また、辞書を使わないことは、単語を前後関係から読み取るという第一義的な意味に加え、自分の頭の中の引き出しの情報を引っ張り出すことの重要性に気づいてもらうこと、そしてなにより、全員に「辞書なし」という「不自由」を背負ってもらうことにより、もし、「正解」からかけ離れた「珍訳」を皆の前で披露する事態になった時でも「辞書なしだから」と、全員で『仕方ないね』感を共有することができると考えたからである。

４－１辞書なし英文速読授業のための教材準備について

さて、上述したように、１．少ないボキャブラリーを補い　２．日本語の語彙の少なさをも補い　３．社会常識を補い　４．時事問題に対する知識の少なさを補う教材として日本語の新聞と、そしてその日本語の新聞と同じトピックを取り上げている英字新聞を使用することとした。

日本語の新聞を学生に読んでもらう主な目的としては

１．あらかじめトピックに関する基礎知識を学生に与える

２．英字新聞を読んだ際に、知らない単語が数多く出現する可能性が多いために、「間接的」に日本語新聞に「辞書」の役割を果たさせる　という主な２点が挙げられる。この二点に加え、学生が社会人としての第一歩を踏み出す前に新聞を詠む習慣を身につけてほしいという筆者の強い希望も存在する。

日本語の新聞の記事を選ぶ際には、次の①および②の基準を重要視した。

①長くなりすぎないこと。

通常の新聞で面積は 10cm×15cm 以内を目安とした。前知識を与えすぎ、英字新聞を読むときに推論する余地が少なくなることを防ぐのがその理由である。辞書なし速読の第一義的目標は文章の流れや単語や熟語の前後関係から、知らない単語でもその意味を推理・推論することであるから、あまり長い日本語の新聞記事を前知識として与えてしまうと、日本語と英語の一対一の対応を探す事に気をとられることになり、学生から推論すること、推理することの知的楽しみを奪ってしまう事になりかねないと思うからである。

②英字新聞に登場する専門用語の日本語訳がなるべく多く含まれていること。

辞書を使わない速読ではあるが、最新の時事専門用語は、なかなか英和辞典には載っていない場合（間に合わない）が多い。どうしても、全体の流れではなく、「単語」単体の意味にこだわる学生も中にはいるので、『単体』としての単語の意味を明確に学生に納得してもらうためにはなるべく専門用語が日本語では、どの様に表現されるのかが、ストレートに表現されているほうが安心感をあたえやすいのである。また、結果的に英字新聞を読んだときにも、分からない単語の数が絶対的に減少するため学生に達成感を与えることができる。

４－２辞書なし速読授業の進め方

前述したように、先ず日本語で書かれた新聞を学生に配りそれを読んでもらうことから授業を始める。学生の既知の情報を生かすために、さらに学生が自発的なフォローアップを簡単にできるように、記事はなるべく最新のニュースでかつ、極端に思想的あるいは政治的に偏っていない内容になるよう心がけるのが重要であろうと考える。客観的な事実報道に絞り、学生の興味によって反応に偏りができないようにする考慮が必要である。

日本語の新聞を配り、多少幼稚であろうとは思われるが学生を指名、あるいは読んでくれる人を募り輪読するようにしている。輪読する事によって、学生がどの程度その記事の内容についての知識を持っているのか推測でき、またどの程度理解しているのかを把握することができる。学生の理解度に応じて、必要な知識を追加するように心がけ、記事の背景にある問題点などの補足説明をするようにしている。

このような、遣り取りを通して学生との『英語の学習』以上の交流を持つことが結果的に授業中の学生の積極的参加に繋がっているのである。『発言することが積極的に評価される』という感覚を学生には持って欲しいというのが私の信念である。授業中に学生が積極的に発言する機会を増やすと、学生の学習意欲は増進し、また発言が正解であるか否かを気にする学生は減少する。廊下ですれ違いに挨拶をしてくれる学生が増加することも嬉しい限りである。
また、新聞を読むことは、実学的視点からいえば就職活動の際の一般常識試験対策としての側面をも持っていることが強調されて良いと思う。新聞を輪読することも、日本語を声を出して読む機会が少ない現代の学生達に漢字の読み方の確認、社会人としての常識の確認といった学生にとっては「余計なお世話」的なステップではあろうが就職試験に向けての、知識補完の役割を果たしえると確信している。

４－３　授業の実践具体例の紹介

ここに具体的な授業例を紹介したいと思う。トピックとして選んだのは

2005 年４月２５日、兵庫県尼崎市で起きたＪＲ宝塚線（福知山線）の脱線事故である。学生にとっても、この事故のニュースを耳に入れない事は不可能であったろうし、また同年代の人々が多数犠牲になったこの事故について考え、様々な事に思いをはせるきっかけになればと思ったのである。

朝日新聞２００５年５月９日付の以下の記事を選び、記事の最初の２００字のみをコピーして学生に配布した。以下のように、大変、短い記事である。
また、以下が学生に配布した２００５年５月９日付けの The Japan Times の記事である。学生に配布した日本語の新聞の内容と共通部分が多い記事を選択し、英語の表現がなるべく日本語の新聞の中に使われている表現と重なり合う部分が多いものを選んだ。

カーブ減速設備義務化

JR事故で国交相表明 全鉄道を対象

兵庫県尼崎市のＪＲ宝塚線（福知山線）の脱線事故を受けて、北側国土交通相は8日、全国の鉄道会社に、新型の自動列車停止装置（ＡＴＳ－Ｐ）など、急カーブでの列車の速度を制御できる設備を義務づける考えを明らかにした。脱線した快速電車は制限速度を大幅に超える速度でカーブに入ったことが分かっており、カーブでの安全対策が必要と判断した。国交省は、設置を義務化する場所について条件を決めるとともに、財政支援策を検討する。

以下に示した英文が学生に配布した *The Japan Times* 2005年5月9日付けの記事である。事故から、約二週間経過しており、学生には充分な情報を得る機会があったと想像できる。

学生には、二つのパラグラフを日本語で表現しなおすように指示した。

筆者は学生に英文の日本語への変換を指示する際には『日本語に訳してください』という表現を使わないように心がけている。経験上、日本語に『訳す』と言う指示を耳にした途端に表現の自由度が封印されるように感ずるからである。自由な発想を持って日本語に変換する「作業」を楽しんでもらうためには対象となる英文が「何を言おうとしているのか、それについて自分はどう思うのか」という、自分でコントロールできる対象として、文章を捉える必要があると思われるのである。文章の表象的なもののみを捉えるのではなく、対象をより感覚的・具体的に捉え直す事により理解が深まるのは明らかである。

学生には『一度読めば、意味が通じるような日本語に直してください』と指示し、極力、直訳は避けるように説明した。さらに、直訳にすると意味がとりづらいと思われる英語の表現を6箇所指定し、日本語に直すように指定した。指定箇所は、すべて日本語の新聞を注意深く読めば訳が出ており、英語の新聞だけでも前後関係で、意味が取れるような箇所を指定した。また、この事故に関する報道は連日かなりの頻度で耳にしているはずであり、学生それぞれが、見聞きした情報からも推測できるであろうと考えた。

Railways face order to upgrade auto brake systems *The Japan Times*、 *9 May 2005*

The government may force railway operators nationwide to install the latest automatic train stop systems for critical sections of track, transport minister Kazuo Kitagawa said Sunday.

The move comes after the fatal derailment of a JR Fukuchiyama Line commuter train in Amagasaki, Hyogo Prefecture, on April 25 that killed 107people and injured 460. The train crashed into an apartment building along the tracks when it failed to negotiate a curve.

1. negotiate a curve
2. critical sections of track
3. transport minister
4. railway operators nationwide
5. derailment
6. auto brake systems

学生にとって、おそらく意味がとりづらいであろうと筆者が想像した英語表現を次に列挙する。
また、それぞれの単語の右に示した日本語の表現は学生に配布した日本語の新聞の中から直接対応している単語のみを書き出した。前後関係から推測できる訳ではなく、『直接対応する単語のみ』である。

英字新聞の中の表現	日本語の新聞中の対応表現
the government	＊＊＊
railroad operators nationwide	全鉄道
install	設置
latest automatic train stop system	新型の自動列車停止装置
critical sections of track	急カーブ
transport minister	国土交通相
fatal	＊＊＊
derailment	脱線
Prefecture	県
injured	＊＊＊

crash into　　＊＊＊

negotiate a curve　　＊＊＊

さて、”fatal”　“injured”　“crash into”　“negotiate a curve”に関しては日本語の新聞の中に『直接対応』する表現は存在しない。しかしながら、”injured” の直後に４６０という数字があり、その前には”that killed 107 people”という表現があることから、その内容は容易に意味を推測できることであろう。また、

“crash into” という表現に関しては、その直後に” an apartment building” という単語群が続くことから、よほど投げやりな気分でない限り、当該事故の状況をメディアを通して見聞した断片的知識からでも、その意味を推測できると思われた。

５－１　語彙の豊かさの必要性

現代大学生の語彙力の貧弱さについては語られて久しい。私が大学生であった頃も、こっぴどく、上の世代から『語彙力の低下』を指摘されていた。確かに、学生に授業中に英文を日本語してもらうと、あたかも機械翻訳にかけたかのような、暗号文のような日本語がでてくる。

現在、毎日のようにマスメディアに登場する北朝鮮問題に絡む『六カ国協議（六者協議)』という表現に関して言えば、おそらく日本語でその表現を耳にしている学生は 50％前後ではないかと思う。では、『六カ国協議（六者協議)』を英語で表現できる学生はというと、おそらく限りなく 0％に近づくと思われる。しかし、ここで私が強調したいのは、『六カ国協議（六者協議)』と聞いて “a six-party talk” といえることではなく、北朝鮮問題について書かれた英字新聞を読んで “ a six-party talk “ という表現にぶつかった時に、それが前後関係から『六カ国協議（六者協議)』をさしているのであろうと推測できることが重要なのである。このことは例えば歴史の勉強をするときに史実の起きた年号を丸暗記していることが、史実の歴史全体における意義を理解していることにはならない事に例えられるように思う。前後関係を特定するた

めに年号を把握していることは極めて役立つとは思われるが、史実が影響を受けた他の史実、そして影響しあう史実の関係が歴史の面白さであろう。

５－２　英文速読における日本語語彙力の必要性

さて、前述の英字新聞の記事を学生に日本語に直してもらうにあたり、一つの試みとして、日本語の新聞を与えなかったグループと、日本語の新聞を読んでもらってから英文の日本語訳に取り組んでもらうグループとに分けた。日本語訳の際の適語選択のシャープさには、やはり新聞記事として練り上げられた、適切な表現に予め触れておくことの必要性を感じたからである。

日本語訳の『完成度』を計る基準として、先ず、単純に日本語訳の字数の平均を数値化した。「とにかく日本語に直す」努力と「お手上げ状態」との区別は、とりあえず、字数で計測できると判断した。ちなみに、漢字で書かれるべき語をひらがなで書いている場合は（地名・人名・そのほか常識的に大学生が漢字で書くべきであろうと考えられるもの）漢字に直した場合の字数で計測した。

５－３　顕在的・内在的 encouragement の必要性

日本語の新聞を読んだグループの日本語訳平均文字数は　１１８字

日本語で書かれた新聞を参考にしなかったグループの平均文字数は９６字であり、参照新聞があったグループの方が平均字数が二割強程度多かった。顕著な差は英文新聞から６箇所指定した語群の日本語訳に見られた。

１～６の語群はマスメディアを通して当該事故に関して常識的な知識があれば、そしてその知識を使って「推理」、「推測」しようとする気持ちさえあれば決して日本語の表現に置き換えることは難しくないはずなのである。また、学生には『対応する単一日本語表現』ではなく、『どういうものか大体の説明』で充分である旨を告げてあったので難しい設問ではなかったはずである。けれども、参照新聞が無いグループでは正しく helpless であった。

手がかりも勇気付けも無いグループでは１～６の正解率は１７％であり、こ

れに対し参照新聞ありのグループでの１～６の正解率は６１％であった。
また、同じ教室内で参照新聞有グループ、無グループに分けて同時進行したことから、有グループには、より強い内在的 encouragement が与えられたことになる。つまり、有グループの中では　参照新聞がある　――→　　分かりやすいに違いない――→　がんばろう　という学生の意欲を掻き立てる結果となった。
無グループでは　参照新聞が無い――→　英字新聞なんてわかるはずが無い――→　無理　と言ういわばシフトレバーがバックギアに入った状態を生み出してしまったのである。
多くの教員が経験しているとは思うが「これはそんなに難しくないよ」「皆なら絶対できるよ」という encouragement は学生から想像できないほどの潜在能力を引き出す。学生達に自分たちが「どれだけできないか」を自覚させるのが目標ではないのであるから、ケチをつけることは絶対してはならない事なのである。

つまり学生に「知っている」「分かっている」単語に着目してもらい、日頃、備え続けた知識、一般常識を駆使するように、そして「推理」「推測」するよう動機付けする事が最も重要である。『選択の理論が優先され過ぎている』（NPO 法人『教育制度研究フォーラム』朝日新聞　2005 年６月８日）センター試験をくぐり抜けてきた学生たちに、試行錯誤を経た「推理」「推測」の重要性に気づいてもらうためには、講義時間内に適切な encouragement を与え続けることが教員の重要な役割である。

６　まとめ

筆者は現在、大東文化大学外国語学部で「速読法」に加え、「通訳法」を担当しているが、上述したように『知識の蓄積』が速読のみならず、速読を応用しなければならない「通訳」の分野でも当然のことながら必要不可欠である。

学生に、スピーチ通訳の練習教材として、前任在日米国大使の離任スピーチを使ったことがあったが　the long existing problems between Japan and

the US ――を「日米両国間に横たわる、ながきに渡る解決しがたい諸問題」と日本語に訳せる事と同じ位、あるいはそれ以上に大切な事は、その problems の内容について把握しているか否かでる。学生たちは比較的その内容を把握していた。

しかし、ロシア関連の資料を勉強した際には the Northern Territories issue に関して知識を持っている学生はほとんどいなかったため、その資料を使うことは筆者にとっても学生にとっても苦痛であった。明らかに英語を日本語にすることが「第一歩」である『通訳』の場面では速読を超えた「推読」とでもいえる力も要求される。例えば前述のようなスピーチで I would like to thank you from～と聞こえたならば次は the bottom of my heart であることを『推読』『推論』し、from が聞こえた時点で「心より感謝申し上げます」と先取りして発声できるような知識があると大変な心の余裕がうまれるのである。

資料の持つ問題背景を把握していることは辞書無し速読、あるいは通訳には欠かせない。次に来る単語、また次に語られるであろうポイントを推測できる。例えば to the point of まで読めば恐らく次は no return がくるであろうから、to the point of まで聞こえた、あるいは読んだ時点で 「すでに後戻りできない」つまり、何らかの結論、解決が急がれていることを踏まえた日本語訳を頭の中で考えなければならない。そのような観点から、多くの日本語訳の選択肢のなかから最も適切と判断できる日本語を選び出すのである。

英文長文速読読解において重要な事は「後戻りしない日本語訳」をどんどん進めていく事、右に右に次々現れる単語の意味を更なる追加情報として加味しながら、訳を進めていく事である。

筆者は、英文長文速読読解を学生に指導するにあたり、英単語の意味検索以前に先ず、学生に長文のトピックに関して書かれた日本語の新聞記事を予め学生に読んでもらい、その内容についての知識を得た後に、英文の解釈を学生にしてもらう事により、英和辞典を使用することなく速読する手法を使い、日本語訳に要する時間を著しく短縮することのみならず、内容に対する理解が格

段に深まるために、日本語に訳した際の文章が驚くほど理解しやすく、日本語訳としてより完成度の高いものになることを実感、そして上述のような分析結果を得た。

このような英文長文速読方法を導入、実践する事により、学生が時事問題に関心を持ち教員の手を離れてからも、その関心を持続し、一般教養・社会常識を蓄積し、その推理・推論する力を英文の速読のみならず、社会人として適切な行動規範の決定推進力として役立ててくれる日が来ることを願っているのである。

参考文献

TOEIC テストボキャブラリー攻略	小山内・小林他	2004 年三修社
論理的に考えること	山下正男	2003 年岩波文庫
国連英検問題集		2005 年　三修社
実用英語検定試験問題集		2005 年　旺文社
子供を育てる魔法の言葉	Dorothy Nolte	1999 年　PHP 研究所
数学的思考法	芹沢光雄	2005 年　講談社
朝日新聞朝刊		2005 年 5 月 9 日
The Japan Times		2005 年 5 月 9 日
朝日新聞朝刊		2005 年 6 月 8 日
リーディング能力の育成を目指す授業	小室俊明	語学教育研究論叢第18号